

投稿：事例報告

ドイツおよびカナダにおける小規模農業の意義と課題 —フィールドワークによる事例分析—

小林那奈子（奈良女子大学大学院 人間文化研究科 生活文化学専攻）

1. 研究の背景と目的

2014年の国際家族農業年を契機に、国連は2019年から2028年までを「家族農業の10年」として定めた。また国連食糧農業機関（FAO）も、気候変動や飢餓等の諸問題に対応し、持続可能な社会を構築していくうえでは、これまでのような大規模化や効率化を重視する大規模農業ではなく、家族農業や小規模農業¹⁾を重視する政策への転換が重要であることを指摘している。関根（2019）は、家族農業を含めた小規模農業が世界で見直されている理由として、以下の3点を挙げる。その一点目が、食糧問題が課題となり農地の減少や土壌の流亡が深刻化する中、小規模農業は大規模農業よりも土地生産性が高いとされていることである。二点目が、気候変動が深刻となる中、小規模農業は化石燃料への依存度が低いためである。そして三点目が、多くの人口が都市に流入し農村での人口減少と高齢化が進む中、農村部での雇用を創出し地域コミュニティを維持、活性化するために、小規模農業が有効であると考えられていることである。そしてこのような国際的な動きの中で、世界各地でも市民が小規模な農業を見直す事例が数多く見られるようになってきているという（Cockrall-King2012, 白井訳2014）。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、加増農業や小規模農業の目的の多様性に着目して、これらの農業が有する現代的意義と持続に向けた課題を考察する。具体的には、農業の先進地域であるとされるドイツとカナダを対象とし、ドイツにおける家族農業とカナダにおける小規模農業の実態を示すことで明らかにする。

2. 調査方法

(1) 調査方法

本稿では、ドイツおよびカナダのバンクーバーにおける家族農業や小規模農業の実態と課題を検証するために、以下のような調査を実施しデータを取集・分析した。まずドイツでは、有機農業に関わる労働力を必要とするホスト農家と、ホスト農家の家で食事と宿泊を提供してもらい代わりに農作業に対して労働力を提供する WWOOFer（ウーファー）の両者をマッチングする仕組みである World Wide Opportunities on Organic Farms (WWOOF)²⁾を利用し、2018年8月～10月末までの3か月間に4軒の有機農家でフィールドワークを実施した。各農家において、農作業を手伝いながら小規模農業に関わる人々

の生活や意識、有機農業を始めた経緯、経営状況などについて聞き取り調査によってデータを収集した。また、カナダのバンクーバー市では2018年11月～2019年1月末までの3か月間、バンクーバーにおける都市農業の先駆者であるとされるマイケル・レヴェンストン氏が1978年に設立したNPO法人である都市型農園“City Farmer”に拠点を置き、マイケル・レヴェンストン氏や農園のスタッフに活動に関する聞き取り調査を実施するとともに、バンクーバーに広まる複数の市民参加型都市型農園の取り組み内容や設立目的等を、フィールドワーク及び聞き取り調査を行うことにより調査した。

(2) ドイツおよびカナダ・バンクーバー市の概要

ドイツはEUにおける主要農業大国であり、農業生産額はフランス、イタリアに次ぐEU第3位でEU全体の13%を占めている(農林水産省2016)。また、世界有数のエコロジー大国のひとつであり、現在に至るまで環境政策に関する市民運動が各地で数多く展開されてきた(高雄2007)。そのなかでも産業革命による都市化がもたらした住環境の悪化がきっかけで始まったクラインガルテン運動は世界的にも有名であり、ドイツ各地には数多くのクラインガルテンが広まっている。また、政府は有機農業の推進に積極的に取り組んでおり、そのマーケットシェアは、アメリカに次ぎ世界第2位である。

カナダ・バンクーバー市はカナダ南西部のブリティッシュコロンビア州に位置する同州最大の都市である。2009年、バンクーバー市は「バンクーバー2020：明るい緑の未来」を発表し、2020年までにバンクーバーを世界で最も緑豊かな都市にするための10の目標を示した。その中には、小規模な都市型農園や地元産の食材を支援する方針が示されている。また、バンクーバー市が2007年に実施した調査によると、バンクーバー市の半数の世帯が家庭菜園を行う場所を保有しているという(City of Vancouver2007)。なお、2007年に2,765,000 tCO₂eであった温室効果ガスは、2018年には2,440,000 tCO₂eと、12%減少している(CITY OF VANCOUVER2020)。

以上のように、ドイツおよびカナダのバンクーバー市では持続可能な家族農業や小規模農業の先進的取り組みが見られると考えられ、本研究の調査対象地として選定することとした。

3. 調査結果

(1) ドイツにおける家族農業の事例

① 事例1

事例1の農園は、首都ベルリンから南に電車で1時間半ほどのシェーネヴァルデに位置する農園である。60歳代の夫婦、別居する娘2人、パート3人でサイクリング愛好家のためのゲストハウスを運営しており、敷地内にある小規模な農園で収穫した有機野菜を料理に使用したカフェ経営を行っていた。現在は、カフェとゲストハウスの経営により生計を立てている。栽培品目としては、トマト、じゃがいも、りんご、ズッキーニ、かぼちゃ等の野菜・果実であり、野菜以外には鶏を7羽飼育していた。

経営者を務める夫は、かつて都市部に住んでいたが、都会の雑踏から逃れ空気の綺麗な場所で過ごしたいという思いを有するようになった。そのため30年ほど前に妻の実家があるシェーネヴァルデに引越し、ゲストハウスとカフェを開いた。それに伴い農園を始めたが、これはサイクリストに安全で新鮮な食を提供したいという思いがあったからである。写真1は、農園に訪れたサイクリストとの夕食の様子である。

なお、筆者が現地に訪れた際には台湾からも20歳代半ばの女性がWWOOFerとして農園に滞在していた。彼女はドイツに1年間留学をしており、留学が終わる前にドイツでの田舎生活を体験してみたいという思いから農園を訪れた。この農園には毎年10名ほどのWWOOFerが世界各国より訪れており、人手不足の解消という課題を解決するとともに、農園が世界中の人々との農業を通じた国際交流の場として機能していることが明らかとなった。



写真1 訪れたサイクリストとの夕食の様子
出所：2018年8月13日筆者撮影。

② 事例2

事例2の農園は、首都ベルリンから北に電車で1時間半ほどのフリート＝シュテーゲリッツに位置する農園である。30歳代の夫婦2人で、りんご、ズッキーニ、かぼちゃ等の有機野菜の栽培に加えてビールの醸造に取り組んでいる。この夫婦はもともとベルリンの中心市街地に住んでいたが、都会暮らしに疲れたこと、また、廃れる農業の将来を懸念し、2013年に耕地の広がるフリート＝シュテーゲリッツに移住してきた。同居する子どもはそのまま都市部で便利な生活を送ることを希望したが、両親は田舎暮らしの良さや価値を知って欲しいとの思いから、移住を決断した。移住前に耕作放棄地であった土地を移住後、少しずつ耕しているため農園は未完成である。現在は貯金を切り崩しながら、生産したビールや野菜を販売し生計を立てている。夫婦によると、以前の生活に比べ裕福ではない

が、今の生活のほうがより家族との時間を大切にできているという。今後は野菜の収穫量を増やし、ビール事業を拡大していくことで、安定した収入を得ることを目指している。

なお、WWOOF を始めたのは人手不足に加え、子どもたちに様々な国籍の人々と交流する機会を与えたい、田舎暮らしの良さや価値を知ってほしい、という思いからである。2016 年から毎年 5 名ほどの WWOOFer を受け入れている。写真 2 は、日本の手巻きずし作りを通して、家族との交流を行った時の様子である。



写真 2 交流の様子
出所：2018 年 9 月 7 日ホストマザー撮影。

③ 事例 3

3 つ目の事例は、ドイツ北部の港湾都市ハンブルクの中心地から南東に電車とバスで 50 分ほどの場所に位置する農園である。40 歳代の女性 2 人でトマトやケール、スイスチャードなど多種多様な有機野菜を栽培するとともに、それらを販売している。また、鶏の飼育にも取り組んでいる。なお、収穫した野菜は近くのカフェで販売するほか(写真 3)、消費者が生産者に代金を前払いし、定期的に作物を受け取る契約を結ぶ CSA (Community Supported Agriculture) にも取り組み、5 軒ほどの家庭に野菜を定期的に届けている。また、民泊 (Airbnb) の運営や、毎週土曜日にはお得様向けのカフェの経営も行っている。

この 2 人が農業を始めたきっかけは、うち 1 人が仕事のストレスにより体調不良になり、自然に触れ合いながら生活したいという思いを有するようになり、もう 1 人を誘ったことが背景にある。一方で、WWOOF を始めた理由は、農産業における人手不足を解消したかったことに加えて、都市の人々と交流したいという気持ちからである。また、アクセスが容易なハンブルクの中心地に近い農場を選んだのは、田舎に住みながらも都市の刺激を受けたいという思いからであるという。なお、筆者が現地に訪れた際には 20 歳代半ばのドイ

ツとオーストリアの女性2人がWWOOFerとして農園に滞在していた。ドイツ出身の女性は就職前に田舎暮らしをしてみたいという思いから、オーストリアの女性は大学で園芸を専攻しており、就職前に実地で園芸を専攻したいという思いや異国での暮らしを体験してみたいとの思いから農園を訪れていた。



写真3 カフェでの野菜販売の様子
出所：2018年9月30日筆者撮影。

④ 事例4

4つめの事例は、ハンブルクの中心地から南東に電車と車で3時間ほどのダンネンベルクに位置する農園である。40歳代の夫婦と3歳、7歳の子ども2人の4人家族で経営しており、小さな菜園で自家消費用の有機野菜の栽培、養鶏と、ガチョウ、羊の畜産に取り組んでいる（写真4）。妻は学生時代に農業を専攻しており、いつか田舎に移り住みたいと思っていた。そして現在の夫との結婚を機に、夫の故郷であるダンネンベルクに移り住み、農業を始めた。現在居住している住宅は200年ほど前に建てられた家であり、移住後10年を経過した今もなお自分たちでリフォームを行いながら、それを生きがいに生活している。なお、夫は小さな工具店で働いており、夫の農外収入と100頭ほど飼育している羊の羊毛の販売で生計を立てている。

なお、WWOOFを始めたきっかけは、閉塞感のある田舎に住みながらも、都市の人々との交流を行いたいという思いからである。かつては田舎に住みたいと思い引っ越してきたが、都会の刺激的な生活が恋しくなることもあり、その中で、都市部に住む人や他国からのWWOOFerの受け入れが、日々の生活の刺激になっている。



写真 4 羊の畜産風景
出所：2018 年 10 月 10 日筆者撮影。

表 1 ドイツにおける家族農業の実例

	事例 1	事例 2	事例 3	事例 4
家族構成 (その他の 従業員)	60 歳代の夫婦、別 居する娘 2 人、(パート 3 人)	30 歳代の夫婦、 子供 4 人	40 歳代の女性 2 人、 子供 2 人	40 歳代の夫婦、子 供 2 人
栽培品目・ 飼育種	有機野菜（トマト、 じゃがいも、りん ご、ズッキーニ、か ぼちゃ等）・鶏	有機野菜（りん ご、ズッキーニ、 かぼちゃ等）	有機野菜（トマ ト、ケール、スイス チャード等）・鶏	有機野菜（トマトか ぼちゃ等）・羊、鶏、 ガチョウ
農業を始 めた経緯	都会の雑踏から逃れ 空気の綺麗な場所で 過ごしたい・サイク リストに安全でおい しい食を届けたい	都会暮らしの疲 れ・廃れる農業 を懸念	ストレスによる体調 不良から、自然と触 れ合い過ごしたいと いう思い	妻、学生時代に農業 専攻、いつか田舎に 移り住みたいという 思い
農業以外 の事業	サイクリストのため のカフェ・ゲストハ ウス経営	ビール醸造	カフェの開催（毎 週土曜日）・民泊 (Airbnb)	夫、工務店にて就労
主な 収入源	栽培した野菜を用い たサイクリストのため のカフェ・ゲスト ハウス経営	有機野菜・ビー ルの販売	有機野菜の販 売 (CSR)・民泊 (Airbnb)	羊毛の販売・夫の農 外収入

出所：筆者作成

⑤ 小括

表1は各事例の「家族構成（その他の従業員）」、「栽培品目・飼育種」、「農業を始めた経緯」、「農業以外の事業」、「主な収入源」をまとめたものである。

（2）カナダ・バンクーバー市における小規模農業の事例

① NPO 法人 City Farmer

NPO 法人 City Farmer（以下、City Farmer）はバンクーバー省エネルギーセンターで働いていたレヴェンストン氏が、急激に都市化するバンクーバーの将来を懸念し、同志と共に1978年に設立したNPO 法人である。事務所と農園はバンクーバー中心地からバスで南西に30分程の住宅地に位置する。設立当初はカナダ政府からの承認を受けていなかったが、レヴェンストン氏が中心となり「シティ・ファーマー新聞」の発行など多くの都市農業に関する情報を発信したことで政府から着目されるようになり、1981年にはカナダ政府から0.2haの土地を無償で提供されることとなった。それが現在の事務所に隣接する農園である。当時その土地はカナダ太平洋鉄道の線路沿いにあり、酷く汚染されていたことから、土を入れ替え農地として耕すために約2年の月日を要したというが、現在では多種多様な植物が作付けされている農園に生まれ変わっている。門にはかつて前を走っていたカナダ太平洋鉄道の線路が使われている（写真5）。

現在、レヴェンストン氏は農園の取締役（executive director）を担っており、その他に10人ほどのスタッフを雇っている。1994年にはCity Farmerのホームページを開設し、世界中の都市農業に関する情報を発信している。また、近くを通りがかった人や野菜作りに関心のある人々に農園ツアーやコンポストの研修を行うなど（写真6）、バンクーバーの人々が気軽に農業、菜園、食について学べる教育・交流の場を提供している。筆者が訪れた際には、バンクーバー市内の中学校に通う女子生徒がボランティアとして、2週間ほど農作業体験をしていた。農園はバンクーバー市からの補助金で運営されており、農園で収穫した野菜は近くのマーケットで市民に無償で提供されている。レヴェンストン氏は、農業を通じた市民の交流を進めると共に、都市でも食を生産できるということを多くの都市の人々に知ってもらい、より多くの人々に生産者となってもらうことを目指していると話す。



写真5 City Farmer の外観
出所：2018年11月2日筆者撮影。



写真6 市民にコンポストの講習を行っている様子
出所：2018年11月10日筆者撮影。

② Strathcona Community Gardens

Strathcona Community Gardens は、バンクーバー市の中心地から東に電車と徒歩で20分程の緑の少ない住宅地の中に位置する1.2haの農園である。住宅地においても菜園ができる場所がほしいという住民の意向を受け、1985年、レヴェンストーン氏を中心となり開設

した。年会費は 10 カナダドル（約 800 円）であり、1 区画 5 カナダドル（約 400 円）で農地を借り農作物を栽培することができる。現在 50 家族ほどがこの農園で野菜作りに取り組んでいる。また、月に一回の会議や共同作業、パーティーなども開催されており、野菜や堆肥作りの指導を受けることもできる。単に野菜を育てる場としてのみならず、メンバー同士の交流や野菜作りの学習の場としても機能していた。

③ Sole Food Street Farm

Sole Food Street Farm は、バンクーバー市の中心地から南東に電車と徒歩で 10 分ほどのところに位置する農園である。その地域は、カナダで最も貧困層が多く住んでおり、長期的な薬物依存症や精神疾患を抱えている人々が住んでいる地域である。農業を通じてそれらの課題を解決することを目的に 2008 年に創立された。農園は慈善家や銀行など様々な財団からの助成金によって運営されており、北アメリカ最大の都市農園プロジェクトと言われている。農園では麻薬中毒者だった人や精神疾患を抱える人が働いており、野菜を育て市内のマーケットで販売することを通して、そうした人々の交流・雇用の場が創出さ

表 2 カナダ・バンクーバーにおける小規模農業の実例

	NPO 法人 City Farmer	Strathcona Community Gardens	Sole Food Street Farm	UBC Farm
設立年	1978 年	1985 年	2008 年	2000 年
スタッフ・参加者	レヴェンストン氏、スタッフ約 10 名、バンクーバー市民	住宅地に住むバンクーバー市民（約 50 家族）	バンクーバー市民（中心は薬物依存症や精神疾患を抱える者）	学生、教員、バンクーバー市民
活動内容	野菜の栽培、農園ツアー、菜園の講習会、ボランティア受け入れ、都市農業に関する情報発信	野菜の栽培、共同作業、パーティー等交流会	野菜の栽培、市内マーケットでの販売	野菜の栽培、養蜂、養鶏、ファーマーズマーケット、野菜のワークショップ
設立目的	市民への農に関する学習の場の提供	住宅地での菜園・住民同士の交流の場の創出	長期的な薬物依存や精神疾患を抱える人の雇用・交流の場の創出	地球環境にやさしい食料システムの追求
主な運営資金	市からの補助金	参加者からの会費	慈善家や銀行からの補助金	大学からの出資金

出所：筆者作成

れているとともに社会復帰の場にもなっている。

④ UBC Farm

UBC Farm はバンクーバー市の中心地から南西に電車とバスで 45 分ほどのところに位置する 24ha の農園である。UBC とはカナダ・ブリティッシュコロンビア州が設置した州立総合大学であり、農園は大学生や教員が地球環境にやさしい食料システムを追求することを目的に設立された。現在はバンクーバー市民をボランティアとして募り、ファーマーズマーケットや野菜のワークショップなどを定期的に開催している。農園では 200 種類以上の果物、野菜、ハーブを栽培しているほか、養蜂や養鶏にも取り組んでいる。City Farmer で出会った女性スタッフは UBC Farm のスタッフも兼任しており、都市型農業に取り組む人々のネットワークが存在することが明らかとなった。

⑤ 小括

表 2 は各事例の「設立年」、「スタッフ・参加者」、「活動内容」、「設立目的」、「主な運営資金源」をまとめたものである。

4. まとめ

本節では、以上述べてきたドイツおよびカナダにおける家族農業・小規模農業を対象にしたフィールドワークの調査結果より明らかになった点をまとめ、家族・小規模農業の現代的な意義や課題を述べる。

まずドイツの 4 事例からは、いずれの農家も、家族のあるメンバーが自然豊かな土地での生活を望み、農業を始めるために移住し農業に関わっていることが明らかとなった。また、そのような生活を望んだきっかけとしては、都市部での生活や仕事による疲労、廃れる農業への懸念という 2 つの理由があった。そのような生活を求めつつも、事例 3 と事例 4 の農家では、都市部での便利な生活が恋しくなることもあるとの語りが聞かれ、その解決策として各国からの WWOOFer を受け入れることとなり、それによって日々の生活の刺激になっていることが明らかとなった。また 4 つのいずれの事例においても農業経営を行う上で人手が十分ではなく、農作業の労働力不足を補うために WWOOFer を受け入れていることも見て取れた。一方で経営面に着目すると、いずれの事例においても農業経営のみでは収入が安定しないために、ゲストハウスやカフェ経営、ビール醸造による経営の多角化、農外就労により生計を立てていた。

次に、カナダのバンクーバー市の結果からは、都市における環境悪化を懸念するようになったレヴェンストン氏やその同志が中心となり、バンクーバー市と協同で都市型農園の発展に寄与したことが明らかとなった。さらに、City Farmer を起点とし、バンクーバー市において農園に取り組む人々のネットワークが広がっていた。また、バンクーバー市における農園は、単に野菜を育てる場としてのみならず、薬物依存者や麻薬中毒者の社会復帰に加えて住民同士の交流の場として機能していることが明らかとなった。このような多

面的機能を有する一方で、政府や民間企業等からの寄付も重要であることがわかる。

最後に、ドイツ、カナダのバンクーバー市の調査結果を踏まえ、家族・小規模農業の現代的な意義や課題を示す。まず、ドイツの4事例では、野菜栽培や畜産による農業経営に留まらず、カフェやゲストハウスといった多角的な経営形態をとっていた。ここからは、労働力が限られ多くの収穫量を期待できない小規模・家族農業のみで経営を安定させ、生計を立てていく上での課題が示唆された。一方、カナダのバンクーバー市の事例では、小規模農業を経営・事業として捉えることは不十分であり、小規模農業を社会・文化・教育的側面などの観点から捉える重要性が示された。そしてそのような社会的意義を持つ農園を運営していく上で、政府や民間企業等の資金源が重要となることが明らかになった。

本研究では、小規模・家族農業という大きな枠組みの中で、ドイツ、カナダのバンクーバー市の事例を取り上げた。しかしその内実は多様であり、今後は多様な評価軸から小規模・家族農業を捉えていくことが重要であると考えられる。また、今回の調査で明らかになったのは、ドイツ・カナダにおける小規模・家族農業の一側面に過ぎない。さらなる地域を対象としたフィールドワークを行い、日本との比較も行いながら考察を深めていくことが今後の課題である。

謝辞

この研究は、トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラムの補助を受けたものです。このような貴重な機会を与えて下さったことに、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 国連FAOは家族農業および小規模農業を以下のように定義づけている。家族農業とは、「家族が経営する農業・漁業・養殖・牧畜であり、男女の家族労働力を主として用いて実施されるもの」であり、小規模農業とは、「家族によって営まれており、家族労働力のみ、または家族労働力を主に用いて、所得の大部分をその労働から稼ぎ出している農業（耕種・畜産・林業・養殖業）のこと」であるとしている。
- 2) WWOOFとは有機農場における、「労働力」と「食事・宿」の交換の仕組みであり、受け入れ先とお金のやり取りは一切発生しない。1971年にイングランドで都市の住民が田舎と触れ合える機会を作ることが目的として開始され、現在では日本を含む世界60か国(2015年時点)で行われている。WWOOFを利用する際は、各国ごとのWWOOF専用ホームページを通じて登録を行い、農家と連絡を取り合う仕組みとなっている。

参考文献

- 河内俊英（2006）「ドイツの環境政策に学ぶ」『産業経済研究』46（4）,789-827.
- 関根佳恵（2019）「国連の『家族農業の10年』がめざすもの」小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン（SFFNJ）編『よくわかる 国連「家族農業の10年」と「小農の権利宣言」』農文協,16-34.
- 高雄綾子（2007）「ドイツにおける『市民的環境教育』に関する一考察：伝統的アソシエーション活動であるクラインガルテン制度の実践から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』46,301-309.
- Jennifer Cockrall-king （2012） Food and the City:Urban Agriculture and the New Food Revolution,Prometheus Books（白井和宏訳『シティ・ファーマー 世界の都市で始まる食料自給革命』白水社,2014）.

農林水産省(2019)ドイツの農林水産業概況 (https://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/attach/pdf/index-129.pdf#search=%27%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84+%E8%BE%B2%E6%A5%AD%27) [2020年3月13日参照].

農林水産省【有機農業関連情報】トップ ～有機農業とは～ (<https://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/yuuki/>) [2020年3月19日参照].

CITY OF VANCOUVER(2020) GREENEST CITY 2020 ACTION PLAN (<https://vancouver.ca/files/cov/greenest-city-action-plan-implementation-update-2018-2019.pdf>) [2020年3月27日参照].

IFOAM ORGANIC INTERNATIONAL(2019)The World of Organic Agriculture 2019 (<https://www.ifoam.bio/en/system/files/fibl-press-release-world-2019-02-13-english.pdf>) [2020年3月20日参照].